

## 第一章 噂の新入社員

春、新人が入社し、教育期間が終わると各部に配属された。

「今年はハズレだな。男はなんかヘナヘナしてるし、女は不細工なのばかりだ」

「うちも変わらねぇよ。なんかカスを押しつけられたような気がするんだよな」

喫煙室での無責任な噂が飛び交う中、最も注目されたのは総務部で受付を担当する若井優子だった。

「ああそうだ。受付の新人を見にいかないとな。なんかすごいらしいぞ。ものすごく良い女が入社したらしいんだ」

歴史がある分古い体質の会社で、受付は見た目で採用されるのが暗黙の了解だった。

優子は短大を卒業したばかりであったが、すでに完成された美貌と、熟した男を引きつける身体を持っていた。

輝くほど滑らかで白い肌に、切れ長の目と艶やかな唇、シャープな顎のライン。清潔感のあるショートヘアが美しさを際立たせている。

手足が長くてほっそりした体つきなのに、ブラウスが破けてしまいそうなほど胸が豊かで、ボタンを閉めても脇から下着が見えてしまう。

歩くたびにゆったり揺れる丸く大きな尻も魅力的だ。

スカートにはくっきりと下着の線が浮き、引き締まった脚とともに周囲の視線をひいた。

ウエストに合わせて制服を注文したら尻が入らなかったのも、特注にしたという冗談が信じられるほどの巨尻だった。

仕事以外でお調子者の男性社員に食事を誘われても、顔を赤らめ困惑して黙り込んでしまい、見た目と違って意外に男慣れしていないことが知れ渡ると、それがまた新たな魅力として噂になった。

「今日の専務の予定を教えてもらっても良い？」

ある日、田中健吾が話しかけてきた。

優子が働くのは小さな食品会社だが、田中は親会社から経営企画部に出向してきていた。しかも親は本社の役員だ。

当然専務の予定もシステム上のカレンダーで確認できる権限を持っているはずだが、優子は真剣なまなざしでディスプレイを覗き込んで、生真面目に説明した。

「ああ、そうか。ちょっと自信がなかったんで確認させてもらったんだ。どうもありがとう」

「いいえ、とんでもありません。お役に立てて良かったです」

優子の微笑みは、静かに咲いた花のように優しかった。

田中は長身で顔立ちが整っているだけでなく、本社から出向している、将来が約束された男だった。

優子はそんなことは知らなかったが、仕事の邪魔にならない程度に話しかけてきて、巧みなジョークで笑わせる都会的でスマートな男性と認識していた。

優子は性交の経験がない。

見た目の派手さとは裏腹に、男性に対して消極的だ。恐れていると言っても良い。

なるべくラッシュ時を避けて電車に乗るようにしているが、それでも毎朝スラックス越しの勃起した男根を擦りつけられていた。

身体をひねって逃げようとしても巧みに扉に押しつけられ、尻の割れ目を狙うように肉棒を擦りつけられていた。

そのうち左右から挟まれて尻を触られたり、露骨に顔を近づけられて体臭を嗅がれたりしたこともあった。当然、重たげで目立つ胸も狙われ、何気ない様子を装いながら身体を押しつける者が後を絶たなかった。

恐怖で身体が動かず、日々男性への嫌悪と恐怖が増した。

ある朝、更衣室で泣いている同僚がいた。

「ち、痴○にあって。我慢していれば済むと思ったら……お尻にたくさん精子をかけられて」

同僚や先輩からそんな話を聞いていたことも、男性を遠ざける理由の一つになっていた。

しかし田中は、毎朝襲ってくる痴○や無言で身体を凝視する男たちとは異なって、清潔感があり、礼儀正しかった。親しくなっても一定の距離感を保つ、好ましい男だった。

気がつけば時折カフェで話すようになっていた。

「一人暮らしだと食事でも自分で用意するの？」

「はい、下手ですけど頑張って作ってます」

田中はさりげなく優子の生活パターンを聞き出した。焦らずに時間をかけて、時には同僚の女性を伴って楽しく歓談しながら、少しずつ優子の信頼を得ていった。

優子は気づいていなかったが、田中は周囲を見渡して人がいないのを確認すると、前屈みになった優子の胸元や、しゃがんだときの尻の丸みを身を乗り出して凝視していた。

他の男同様、優子の豊満な肉体に強い興味をもっていた。しかしそのためにおかしな噂が立ったり、自分の将来に影響が出たりしないよう、警戒を怠らなかった。

優子は酒があまり飲めなかったが、田中が、受付の先輩である柏木亜紀という女性と仲が良く、三人で金曜日の夜に飲むことになった。

田中と一対一では抵抗があるが、亜紀がいれば安心だ。

優子は、柏木を、親切で頭の回転が早く、社会人としても尊敬できる女性だと思っていた。

それに受付に配属されるだけあって上品な美しさがあり、優子の目標でもあった。優子にはない、熟した大人の魅力を全身から発しているのが魅力的に思えた。

しかし当日、待ち合わせの場所には田中しかいなかった。

「ごめんね、柏木さんが来られなくなったんだ。出がけに資料を作れって、急に言われたらしいよ」

「あ、それじゃあ……」

優子は不安げな表情を見せた。

確かに柏木から先に行ってくれとは言われたが、仕事のことは何も言っていなかった。スマホにもメッセージが来ていない。

「別に良いよね」

薄いブルーのブラウス、白のタイトミニ。透けるブラジャーと、尻のパンティラインを見る田中の目が輝いている。

「あ、あの……でも……」

必死に言い訳を考える優子に、田中は強引に言葉をかぶせた。

「席、予約しちゃったんだよね。当日キャンセルはちょっとね」

そう言われると優子は弱い。不安を覚えながら、店についていった。

「あまりお酒飲んだことないんでしょう？ 強いのはやめておいたほうが良いね。選んであげようか」

優しげな微笑みと気遣いに、一気に気が緩んだ。

「はい、お願いします。お酒の種類はよくわかりません」

優子が素直に言うと、田中は店員と何やら相談しながら飲み物を決めた。

そして旅行や音楽、映画、ファッションと、優子の反応を見ながら楽しい話題を提供した。

田中が選んだ酒はかすかに甘みがあり、口当たりが良かった。

「飲み過ぎちゃダメだよ」

時折そう言う田中にも好感を覚えた。まるで家族のような安心感があった。

社会人になってずっと緊張が続いていた。毎日の受付業務も強いストレスだった。

それが田中の気遣いとアルコールのせいで一気に解きほぐされた。楽しさのあまり田中に尋ねられたことを何でも話してしまった。

その中には、これまで親しい男性がいなかったことも含まれていた。

「そうかあ、いろいろ経験しておいたほうが良いと思うけどね。いつかは結婚も考えているわけでしょう」

「結婚ですかぁ」

考えるふりをしたが、目の前のグラスがぐるぐる回り、何も頭に浮かんでこない。

「ええと……そうですねえ……」

そこまで話してぷつりと記憶が途切れた。